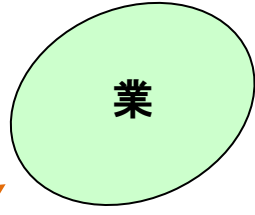


多様な主体の参加と連携による持続的発展が可能な共生の仕組み—東近江市は、里山、里地、里湖が一つの水系でつながる、人口、面積ともに、日本の 1000 分の 1 モデル、近江商人“三方よし”の経営理念—

2010/4/22現在  
名前はハブキーマン、「」は市職員、\_\_\_は低炭素社会づくり円卓会議メンバー 赤字はそれぞれのクロスポイント



○ 湖東地域材循環システム協議会  
「山口」・田中  
事業者と行政が地域の森林資源を循環利用するための、コーディネート組織。Kikito プロジェクトを展開

○地産地消の獣害駆除  
田井中・「小泉」  
農業被害を軽減するために捕獲された鳥獣を地域の温泉や宿泊施設で食材として提供

ヒトミワイナリー岸本、京セラ澤田、マーガレットステーション藤岡、池田牧場池田、ココヨ工業滋賀山内、たねや頼田、旅行業小倉、大工業楠亀、ノエビア、ファブリカ村

○ 田舎体験(民泊体験)  
「瀧澤」・「野口」・清水・「雁瀬」・藤澤(日野町)  
豊かな自然や農林商工業、生活文化等の生業、人々の生活の姿を伝える体験学習を企画

○東近江ハンドシェイク協議会 増田・清水・「野村」  
市内の環境系 NPO5 団体、東部のまち協4 団体、財団法人、市で構成。20 年 7 月に設立。有形無形の地域資源を発掘し、それをつなぎ活用することで地域の自立を促し、福祉モールネットにも連携している。①エコ体験・農村体験プログラムの開発、②地元食の提供の場づくり、農家レストラン③農家民泊・空家活用を進める

○東近江次世代エネルギーパーク構想 「植田」  
新エネルギーを生かした産業の創出と観光の活性化を目指す。布引運動公園、菜の花館、市民共同発電、京セラ、商工会議所(SUN 讚プロジェクト)等を拠点にエコツアーの開発、学習プログラムの開発を進める

○エコラボハート事業、障がい者働き場ネットワーク 城・野々村  
環境配慮製品を障がい者が配送することで雇用の創出を生み出し、併せて、障がい教育、環境教育につながり、環境と障がいのコラボと CSR をすすめる。併せて、葬儀屋、古本屋、介護屋、葉刈屋、めし屋、洗い屋、精米屋、パン屋、うどん屋、酪農屋、郵便屋などこれからの障がい者の新たな働き場開発を、異業種連携の中から進める。福祉モールネットにもつながる

●2030年、50%削減 ●地域自立、地域力の向上  
●食とエネルギーとケアの自立 ●資源循環 ●担い手育成  
●交流人口増から定住へ ●農的ライフスタイルの提案  
●スローフード、空屋活用  
●農家民宿、レストラン  
●グリーンツーリズム  
●エコツーリズム  
●里山保全、獣害対策  
●障がい者の働く場提供  
●退職サラリーマン地域デビュー

地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会研究開発プログラム内藤・金・小橋・「野村」・「山口」・「山本」低炭素社会づくり定量化モデル推進円卓会議

○ひがしおうみコミュニティビジネス推進協議会 橋本  
コミュニティファンド等を活用し、地産地消型エネルギーの供給を目指す。地域商品券を活用して、他分野と連携する。

○大樹会ネットワーク 嶋田  
農事法人を設立し、障がい者就労支援「湯屋の里」の障がい者が、高齢者支援、農業や牛の放牧＝里山保全、獣害対策の担い手になり、農家レストランも視野に入れることで、仕事を通じた自立の道を歩む

○東近江市 SUN 讚プロジェクト 吉田  
商工会議所が主体となり、エネルギーの地産地消による地域経済の活性化を目指す。地域商品券を活用して、他分野と連携

○三方よし研究会 角野・小島・中村  
医療関係者だけでなく、介護系や市民も参加し、顔の見える中で地域連携クリティカルパスの仕組みづくりを推進し、それが医療福祉を考える懇話会につながる

○奥永源寺ルネサンスの会 「瀧澤」・小椋  
石樽トンネル開通を好機にして永源寺東部地域の再生を目指し、三重県北部の人材の呼び込み等、中山間地域の自立を目指す話し合いの場

○ 地域から医療福祉を考える東近江懇話会 小橋・小島・中村  
市民が医療・看護・介護・宗教者・図書館・救急などの専門家と連携して、医療福祉体制を守る活動を展開し、図書館の患者闘病日記コーナー、そして若い母親が「はちどりの会」を作り、「病院に行くその前に」を作成し、コンビニ受診の改善を目指す

○遊林会 「武藤」・「丸橋」  
お酒やおいしい家庭料理をいただきながら、木を切って里山を守る、楽しい里山保全活動を通して、退職サラリーマンの地域デビュー、子供や親の環境体験教育を進める、それはそのまま青空デイサービスなんだと！！、里山保全を通して、行政と NPO の連携を進めるユニークな NPO

○図書館ネットワーク 「巽」・「前崎」・「嶋田」  
単に図書の貸し出しにとどまらず、環境・福祉・健康・医療・農業・文化・まちづくりなどの分野それぞれを、クロスする仕掛けや地域連携を、図書館ネットで支援し、その中から、疾患別の患者闘病日記コーナーで医療福祉の動きを支援、グリーンメンテナンスで障がい者雇用を支援、図書のリサイクルシステムで環境支援を行う

○冒険遊び場 「村山」・廣田  
「子供たちの自由な遊び場」「子供たちの冒険心や好奇心がいっぱいあふれた遊び場」この遊び場づくりを通して、乳幼児期から思春期までの子供の育ちを、家庭と学校・園だけでなく、地域とともに支援する。

○東近江 NPO センター 阿部  
東近江地域の市民事業の連携や立ち上げ支援、情報提供、交流促進をはかるとともに、いろんな分野のマッチングコーディネーターを目指す。

○退職サラリーマン地域デビュー支援 森田・大塚  
仲間作りを通じた退職サラリーマンの地域デビューの仕組みづくり、行政の下請けでない、自らのスキルを生かした役割づくりを追求しこの地域の、いろいろな動きに参加する

○茗荷村 仲本・高城  
障がいを持つ人と健常者が共に暮らす中で、自立循環型・少量生産少消費社会づくりを目指し、牛の放牧＝里山保全、障がい者による農家レストランも指向する

○福祉モール構想 太田・小橋  
医療福祉を考える懇話会から生まれ、地域で高齢者を支える NPO 結の家が呼び掛け、福祉・医療等の関係者が中心に、認知症になっても、脳卒中になっても、介護保険の対象にならなくても、障がいがあっても、安心して暮らせるエリア、拠点づくりに取り組み、茗荷村、大樹会と連携した、農家レストランを活用した、障がい者による給食配食サービスも視野に入れる

○認知症ケア 「若林」・中村  
認知症の人と家族を地域で支えるため、博物館や図書館人材とリンクし、回想法や行方不明 SOS ネット訓練、啓発サポーターづくりを実施し、福祉モールネットにもリンクする



## 緑の分権改革を実現する東近江モデル

### —日本の 1,000 分の 1 モデル、近江商人“三方よし”の経営理念—

#### エネルギーは太陽光・バイオマスを基本

太陽光 70%普及、農機 100%BDF など

参加主体：東近江市 SUN 讚プロジェクト、ひがしおうみコミュニティビジネス協議会、東近江次世代エネルギーパーク構想、菜の花エコプロジェクト、湖東地域材循環システム協議会 (kikito) 等

#### 車の少ない都市

自転車、ベロタクシー、CATV で検診可能

参加主体：近江鉄道、市営ちよこっとバス、エコラボハート事業、障がい者働き場ネット 等

#### 福祉・医療・保健が一体化された地域

地域包括ケア、ソーシャルファーム

参加主体：福祉モール、茗荷村、大樹会ネットワーク、三方よし研究会、認知症ケア、地域から医療福祉を考える東近江懇話会、 等

#### 地域で育ち、学び、働く

生涯体験学習、近所の子育て・介護支援、

参加主体：福祉モール、菜の花エコプロジェクト、冒険遊び場、遊林会、東近江 NPO センター、エコラボハート事業、障がい者働き場ネット 等

#### 日本一住みやすいまち

自助・共助、地域ビジネス活性化、3世代で住める

参加主体：東近江ハンドシェーク協議会、ひがしおうみコミュニティビジネス協議会、菜の花エコプロジェクト、奥永源寺ルネサンスの会、遊林会、福祉モール、障がい者働き場ネット 等

#### 新 6 次産業

地域ブランド、産学連携、林業活性化、半農半 X

参加主体：東近江ハンドシェーク協議会、菜の花エコプロジェクト、奥永源寺ルネサンスの会、湖東地域材循環システム協議会 (kikito)、障がい者働き場ネット、マーガレットステーション、ファブリカ村、ノエビア、コクヨ工業滋賀 等

#### 循環型社会の確立

自給自食、焼却場が発電所、堆肥化、給食の充実

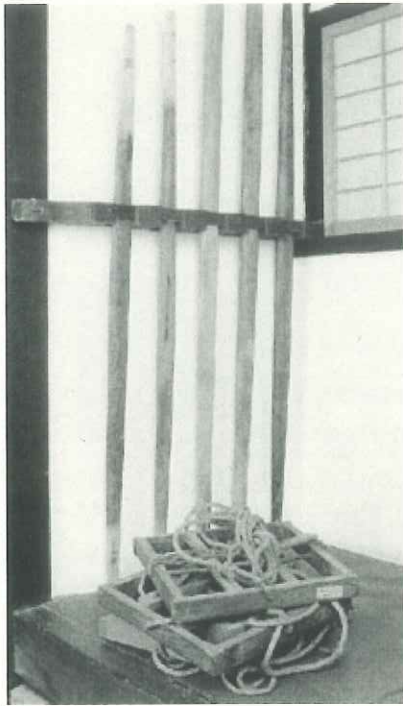
参加主体：菜の花エコプロジェクト、平田まちづくり協議会、茗荷村、東近江ハンドシェーク協議会、岡本夢プラン委員会 等

#### 里山・里地・里湖の賢明な利用

豊かな生態系、景観の保全、魚のとれる川、

参加主体：琵琶湖の森の生き物研究会、遊林会、びわ湖の森の健康診断キダス実行委員会 等





天秤棒掛け

商取引においては、当事者の売り手と買い手だけでなく、その取引が社会全体の幸福につながるものでなければならないという意味での、売り手よし、買い手よし、世間よしという「三方よし」の理念は、近江商人の経営理念に由来する。

旧国名を近江という現在の滋賀県に属する地域からは、江戸時代から明治期にわたって、近江商人と呼ばれる多くの大商人が次々に出現した。彼らは近江に本宅を構え、行商の初期には上方の商品と地方物産の有無を通じる持下(もちくだ)り商いに従事し、資産ができると要地に複数の出店を築き、産物廻しという持下り商いの大規模化した商法を出店間で実施して、さらに大きな富を蓄積した。近江商人という人々は、地元の近江を活動の場とするのではなく、近江国外で活躍し、原材料(地方物産)の移入と完成品(上方商品)の移出を手がけ、現在の日本の経済と経営を先取りするような先進的な商人達であった。

近江国外での他国行商を本務とした近江商人は、行商先の人々の間に信用という目に見えない財産を築いていかなければならなかった。持下り商いは、一回きりの売込みではなく、自分が見込んだ国や地域へ毎年出かけ、地縁や血縁もないところに得意先を開拓し、地盤を広げていかなければならないのである。

異境を行商してまわり、異国に開いた出店を発展させようとする近江商人にとっては、もともと何のゆかりもなかった人々から信頼を得ることが肝心であった。その他国商いのための心構えを説いた近江商人の教えが、現代では「三方よし」という言葉に集約して表現されるようになったのである。